

図2 ラオス人民民主共和国の献血状況

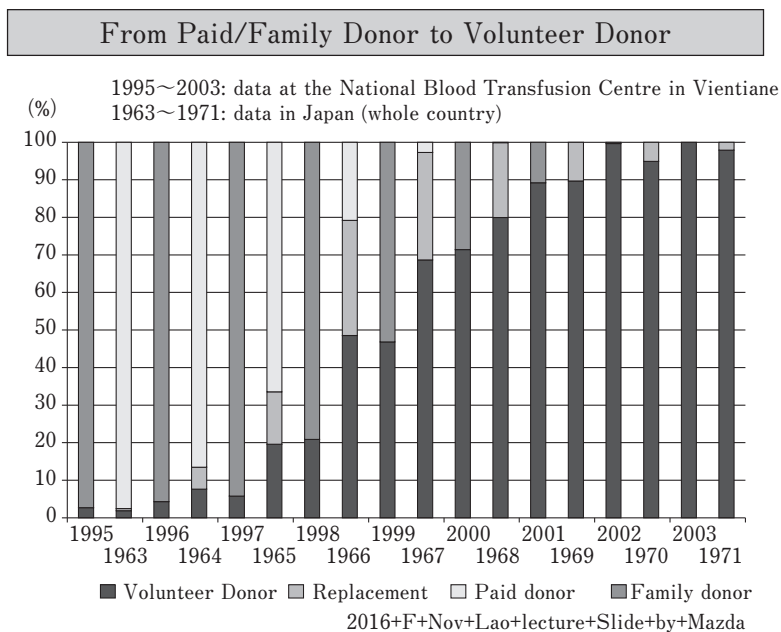


図3 ラオス人民民主共和国の献血状況

第二次支援：2012～2017年ラオス赤十字血液センターの「品質保証機能と運営能力強化支援」の依頼を受けて技術要員を派遣し、基準書・SOPの作成、教育訓練の実施、SOP導入後の自己点検実施体制および業務運営機能体制を構築した。この期間の派遣者は医師2名、採血、検査、製剤の技術者8名である。

【第二次支援状況と結果】

現地視察をもとに、各種基準書、採血、検査、製剤・供給のSOPおよび確認用チェックリストを作成し、全国研修会を開催した。献血、採血部門のSPOの作成はラオス赤の主体性を尊重しながら、実施している手順をSOP化することから始め、品質に関わる採取量、採血部位の消毒や、効率的な検体採取、採取バッグのセグメント作成、原料血液および検体の搬出等の手順についてアドバイスを行った。17県の代表者は全国研修会に参加し自センターで教育担当者として、SOPの導入に携った。SOPの導入状況は各センターの自己点検結果および業務査察で確認した。ラオス中央血液センターを本部とし、3地域センター（北部、中部、南部）と13地方センターで組織され、本部が地域センターを、地域センターが地方センターを確認する体制を構築し運営機能強化を図った。ラオス支援事業評価項目として、基準書およびSOP、教育訓練用DVDビデオやチェックリスト、ワークショップに受講後の教育訓練について業務査察で確認した。

支援事業達成度は20%間隔の5段階で評価しほぼすべての項目において導入前の20%から60%にアップすることができた。しかし、成分輸血療法の普及活動は病院医師および病院関係者対象の説明会は2回実施に留まった。

【ラオス支援の課題】

日本赤十字社血液事業本部は技術援助を基本とし国際協力支援をしているため、資機材や試薬類

の不足からSOP等には制限が生じることがある。安全な技術の導入や献血者の安全確保には資機材や試薬類の整備資金やメンテランス等の援助も必要であると考ええる。

【求められる看護師と課題】

日本赤十字社の職員として、Mission statementを念頭に、採血事業を熟知しており、必要としている知識、技術を相手国の状況を理解し伝えることができる。そのためには、語学力も必要な要素であるが、コミュニケーションスキルを向上させることが最も重要である。今後は、人材確保、人材育成そして長期間出張可能な体制の構築を目指したい。

【まとめ】

日本赤十字社は、日本で唯一献血の受付から医療機関への供給を行っている団体である。アジア・太平洋地域の赤十字・赤新月社から研修生を受け入れ、血液事業の幹部職員を育成し、母国の活動促進に貢献している。品質管理や技術面に焦点をおきながらアジア地域における血液事業の発展と協力関係の強化を図っている。

我々血液事業に従事する看護師も、支援を必要としている人、国々に今まで培ってきた経験、技術、知識を伝え引継ぐ義務がある。そのためには、多角的な業務のスキルを身につけた職員を育成し支援に参加することや、研修生の受け入れに積極的に関わることは看護師自らのモチベーションやスキルにつながる。

また、海外支援に従事する職員は事前教育の充実と職場の支援体制が重要で、派遣期間中は安心して海外支援に専従できる体制の構築を切望する。

今回私が経験したラオス血液事業の支援は諸先輩方とラオス赤十字の皆さんが築いてきた20年間に基づいている。このような貴重な経験ができたことに感謝するとともに今後も友好関係、支援が継続されることを願います。